

インド海外研修のために、お祈りをありがとうございました。伝道旅行の名にふさわしい、大変充実した8日間でした。4日間2件ずつの家の教会を訪問しましたが、毎回5～10名の受洗者が起こされ、それぞれの新しいリーダーが任命されて「家の教会」が誕生する、という現実を目撃してきました。3チームでしたので、合計で400名ほどに福音を提示し、200名が受洗し、20の教会と新しいリーダーが任命されました。4日間で、しかも英語もろくにできない者たちの伝道によって！

常識では考えられない現実を、「神業だ！」と言いますが、まさに、神様のなされる御業は、私たちの理解や限界を、はるかに超えて働かれるのだと教えられました。

世界の権力

私たちが、平和を実現させるために必要だと考えるものは何でしょう。結局は、財力であったり、実力を行使できる権力であったり、あるいは「家族」や「民族」を守るという線引きであったりするのではないのでしょうか。インドでも、入国だけでなく出国でも数日間の滞在にも拘らずビザの提示を求められ、世界遺産タージマハルでは、ライフルを持った人たちに、空港以上のボディチェックをされました。

信仰の世界でも、人間である以上、この考え方の宿命から逃れることは簡単ではありません。律法学者たちは、彼らなりの言い分もあつたでしょう。ローマ帝国に対抗するためには、ユダヤの王が必要である、とか、秩序と安定のためには、長い衣や座席の指定が大事なのだ、とか。でも、人間の力で何とかしなければならない、と思えば思うほど、救いと解決のために、平和からむしろ遠ざかってしまう構造を生み出してしまいます。武器や排除が平和をもたらすことがないように、知ったかぶりの長い祈りや細かい宗教規則が、本当の救いをもたらすことは、残念ながらありません。

人間の心といのちの主

私たちに本当に必要なことは、神様の恵みの大きさを、私たち人間の範疇を超えた想定外のものであることを信じることなのです。律法学者や群衆は、「メシア（救世主）はダビデの子」という古風な言い回しで、救い主を政治的な王権の復興に限定して、待望していました。しかし、イエス様は「ダビデ自身が、メシアを主と呼んでいる」と言いました。イエス・キリストは、ダビデの時代から既に存在し、メシアとして、父なる神の右の座におられたのです。ダビデ以上の、つまり全人類の心と命に、神の愛を届ける救い主こそ、本当のメシアであることを教えられました。そして、十字架で罪をあがない、三日目に復活されたことによって、救いを完成されました。これは、やはり神の御業です。私たちの努力の成果などでは決してありません。

この、壮大な神様のご計画の前に、自分自身の小ささを認め、信仰を告白する時、心といのちに平和が訪れます。悲劇は回避され、永遠の命が与えられるのです。